

Exhibition of Institute for
Art Anthropology,
Tama Art University

UNZEN — The Heisei Eruption:
through Sunamori Katsumi
and Mitsuyuki Toyohito

UNZEN

「平成の島原大変」..
砂守勝巳と満行豊人をめぐって



Sunamori Katsumi

主催・運営：多摩美術大学芸術人類学研究所
監修：榎木野衣
キュレーション協力：砂守かずら
Organized by: Institute for Art Anthropology,
Tama Art University
Supervisor: Sawaragi Noi
Planning cooperation: Sunamori Kazura

大地と火山、災害と表現、記憶と伝承

2022
6.3 [Fri] — 6.18 [Sat]

多摩美術大学 八王子キャンパス
アートテーク・ギャラリー2F
(東京都八王子市鎌水2-1723)
開館時間：10時—17時
休館日：日曜日 入場無料

Mitsuyuki Toyohito



上:砂守勝巳(雲仙・長崎)より 1993-95年/下:満行豊人(雲仙・普賢岳噴火災害の爪痕)より 2011-21年

記憶と伝承、災害と表現、大地と火山、

自然災害と芸術表現は、とすると、これまであまり関係のないものと考えられてきた。けれども、遙か過去へと時を遡るなら、人類が自然との対峙によってつねに命の危機に晒されてきたのは明らかだ。きっと、数えきれぬほどの人が命を落としたことだろう。そんな時、突然この世を去った人々への慰霊や、残された者が必要とするささやかな希望として、人類は当初から、なんらかの「表現」を必要としたのではないだろうか。とするなら、自然災害と芸術表現は、根幹の部分では切り離し難く運動しているはずだ。

今日、地球規模での気候変動が年を追うごとに熾烈となり、世界の各地で例を見ない災害が相次いでいる。遠い過去の「神話」や「伝説」として受け取っていた自然との命がけの対峙は、実際には明日にもわが身へと降りかかりかねない迫真的なものとなった。こうして少し振り返っただけでも、20世紀が世界大戦の時代であったとするなら、21世紀が刻々と災害の世紀となりつつあるのが伺える。日本でも昭和から平成へと元号が切り替わると、列島の各地で大規模な自然災害が多発するようになった。そのうち、阪神淡路大震災と東日本大震災は、とりわけ大きな意味を持つ。それは令和になって突如として人類を襲ったパンデミックによって、依然として大きく変わる気配はない。

だが、これらに先駆けて、1991年に江戸時代の寛政年間以来となる大火砕流を起こした長崎県島原半島の火山、雲仙・普賢岳による数年にも及ぶ複合的な被害は、その後の「災害の世紀」の到来を先取りするところが多々あった。「寛政の島原大変」と呼ばれたかつての「大変」に対し、本展ではこの「平成の島原大変」に焦点を当て、これと取り組んだ二人の表現者——砂守勝巳と満行豊人——が残した写真と絵画の展示を中心に据える。そして、ここに歴史・地理・地学の知見を添え、記憶の継承や防災的側面も併せて盛り込み、「UNZEN」と総称し、芸術人類学的な見地から、美術大学がないうる「美術展」というかたちで、「災害と表現」という新たな次元へと迫ってみたい。

—— 榎木野衣 (本展監修)

砂守勝巳

Sunamori Katsumi
1951-2009

沖縄本島生まれ、奄美大島で少年時代を過ごし、15歳で大阪へ移住。プロボクサーを経て写真家となる。1975年、大阪写真専門学校を卒業後、主に写真週刊誌を中心に活動する。雲仙・普賢岳噴火災害の被災地を撮影した連作「黙示の町」を発表(銀座/大阪ニコンサロン、1995年)。写真集「漂う島とまる水」(クレオ、1995年)で第15回土門拳賞、第46回日本写真協会新人賞受賞。2009年、胃がんにより57歳で死去。娘である砂守かずらが作品を継承し、近年は「黙示の風景」(原爆の図丸木美術館、2020年)、「黙示の町」(長崎県島原市「まちの寄り処森岳」、2021年)ほか、数々の写真展を開催。



砂守勝巳 (雲仙、長崎)より 島原市中央通り
1993-95年 ©Sunamori Media Archives



砂守勝巳 (雲仙、長崎)より 南島原市深江町戊(山陰保育園)
1993-95年 ©Sunamori Media Archives



ポスター「復興へ語りあおう市民集会」
1992年 松下英爾蔵



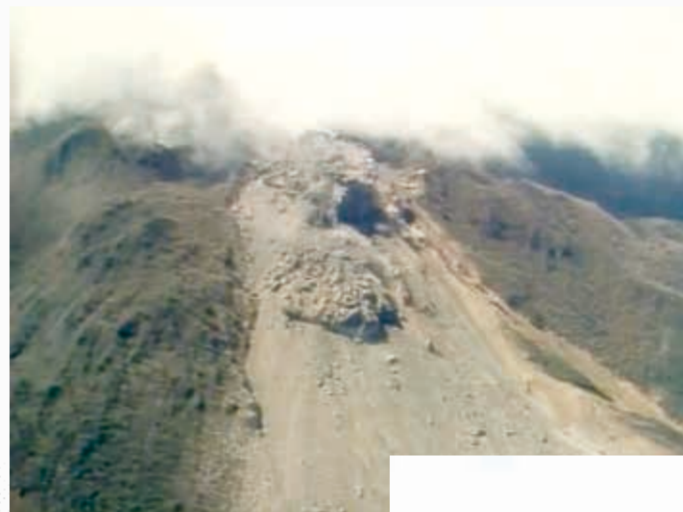
「肥前温泉災記」
江戸後期 肥前島原松平文庫蔵



災害資料(学習机)
かわむき歴史災害記念館蔵 ©Sunamori Kazura



「定点」砂守勝巳撮影
1993-95年 ©Sunamori Media Archives



映像「雲仙普賢岳一噴火活動と災害」16分12秒
2006年 国土交通省 雲仙砂防管理センター



平成2年11月17日
九十九島火口、地獄釜火口、198年ぶりに噴火



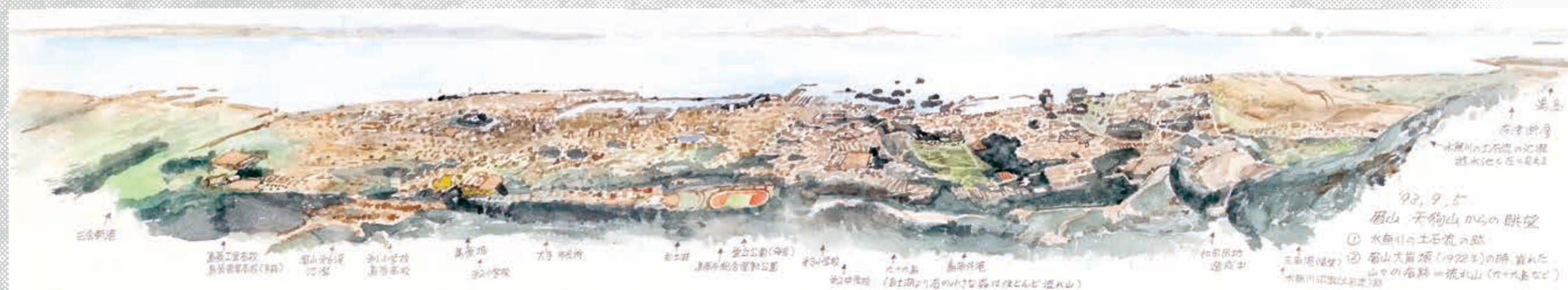
災害資料(掛時計)
かわむき歴史災害記念館蔵 ©Sunamori Kazura



満行豊人 (嵐山中蔵より 新山全景)より
1992年 作家蔵



災害資料(三輪車)
雲仙歴史災害記念館蔵 ©Sunamori Kazura



満行豊人 (‘93.9.5 眉山、天狗山からの眺望)
2011-21年 作家蔵

長崎県平戸生まれ。駒澤大学文学部地理学科卒業後、対馬で中学校教師となる。県立島原商業高校、県立有馬商業高校などで地理を担当。1990年の雲仙・普賢岳噴火を機に、噴火による日々の山の変化を撮影・記録しはじめた。定年退職後、噴火災害の記憶を後世に伝えるため、雲仙岳災害記念館で「語り部ボランティア」を務める傍ら、記録写真を元に水彩画を制作。雲仙岳災害記念館企画展「未来へとどける噴火絵はがき展」(2011年)、「噴火絵はがき展」(2015年)、噴火災害から530年を迎えた2021年には同館企画展「あの時を、振り返る」に出品。

満行豊人 Mitsuyuki Toyohito 1937-

PROGRAM

※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

関連プログラム

朗読

「雲仙・普賢岳噴火災害によせる朗読二題」

日時 6月10日[金]より動画配信予定
配信 <https://www.youtube.com/user/tamabiAA/videos>
(芸術人類学研究所YouTubeチャンネル)
作・朗読 内嶋善之助(島原市・舞台作家)
演目 「普賢岳diary」より、「朗読詩 アンタレスの涙」より

シンポジウム

「表現と記録、記憶の継承 UNZENからはじめる」

日時 6月17日[金] 14:50~16:30(14:20開場)
会場 多摩美術大学 レクチャーCホール
登壇者 岡村幸章(原爆の図丸木美術館学芸員)
笹岡啓子(写真家)
榎木野衣(本展監修、多摩美術大学教授・芸術人類学研究所員)
砂守かずら(砂守メディアアーカイヴス代表)
定員 先着80名程度
参加方法 先着整理券制。
当日13:00より展示会場入口付近にて整理券を配布します。

ACCESS

交通案内

JR横浜線・京王相模原線橋本駅北口から
神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」で約8分。
または、JR八王子駅南口から京王バスで約20分。
路線バス利用案内などの詳細は大学ウェブサイトの「交通アクセス」
(<https://www.tamabi.ac.jp/access/>)をご覧ください。
※学内に一般用の駐車場はありません。お車での来場はご遠慮ください。

多摩美術大学芸術人類学研究所(IAA)
〒192-0394 東京都八王子市鐘水2-1723
TEL:042-679-5697 E-mail:iaa_info@tamabi.ac.jp
<https://www.tamabi.ac.jp/iaa/>

